令和７年度　大学院連合教職実践研究科入学者選抜（２月選抜）

学校臨床力高度化系
専門科目：記述式総合問題

【解答例】

問１（配点 100 点各 20 点）

a. クリティカルシンキング

物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力であり、そのために証拠に基づき論理的に思考することが重要である。他者を批判するよりも、自分の思考を客観的に吟味する「考える力」とすることが多い。

b. ウェルビーイング

身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念である。個人を取り巻く場を含め、包括的に良い状態であることを示す。

c. 学級開き

年度当初にクラス担任として学級を開設し、子どもたちとの出会いの関係づくりをする活動である。よりよい生活や人間関係を作るために学級の目標・組織や雰囲気を、活動などを通して実感させて共有する場である。

d. 教員給与特別措置法(給特法)

日本における公立学校の教育職員の給与や労働条件を定めた法律である。原則的に時間外勤務手当や休日勤務手当を支給しない代わりに、給料の月額の 4%に相当する額を「教職調整額」として支給することが定められている。

e. ESD(Education for Sustainable Development)

持続可能な開発のための教育と訳される。将来の豊かな生活の確保のために、現代社会の問題に主体的に取り組み、新たな価値観や行動等の変容から、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う教育活動である。

問２（１）（配点 50 点）

自律的に学ぶ力を育む実践の在り方としては、次の三つが考えられる。第一に、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の推進である。見通しを持って粘り強く取り組み、自ら

の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」、たとえば子ども自身で学習計画を立て、それに沿って学習を行わせる実践を行うことが有効であると考えられる。

第二に、進度や関心に応じて教材や学び方を選択できるような環境整備である。ただ思うようにやってみなさいと指示するだけではなく、ICT も含めたドリル教材の整備や、学び方について確認できるような側面掲示などが必要である。

第三に、自己効力感を向上させるための発達支持的生徒指導である。授業内外を問わず、子どもに声掛けや励ましを行うことによって、自らの学びに自信がつき、次の学びの意欲を高めることができる。このことが、自律的に学ぶ力を育むことにつながるのではないかと考えられる。

問２（２）（配点 50 点）

児童生徒のメディアバランスを実現するためには、まず、当の児童生徒自身が日常的にどの程度メディアを使用しているかを教師・児童生徒がともに把握することが前提となると考えられる。そのために、たとえば学級活動や情報モラルの授業の場において、普段のメディアとの付き合い方を振り返り、見つめ直す機会をとることが必要である。

いったん自身のメディアの使用について把握できれば、次にバランスのとれたメディア使用とその実現計画を考えさせることが有効であろう。その際、一般にメディアバランスのとり方は人それぞれであるため、児童生徒一人ひとりに考えさせることが重要である。

また、メディアバランスを実現するうえでは、保護者との連携も欠かせない。家庭でのメディアの使用について、保護者と共通理解を図り、児童生徒を含めた三者でメディアバランスの実現方策を探っていくことも取り入れるべきである。